(2)

大東亞建設民族人口資料一八
昭和十七年三月十日

支那の農業生産力に關する調査（其の一）

厚生省人口問題研究所

目次

一　基本的生産関係　一
二　生産諸力　二〇
三　生産力――農業経営調査結果の分析　三八

支那の農業生産力に関する調査（其の一）

一　基本的生産関係

他の凡ての産業部門におけると同様に、農業においても、その生産力はこれを構成する個々の要素である生産諸力の結合の結果として實現されるものであり、之を分析するならば、生産諸力は生産手段と勞働力とに二大別することができ、生産手段はさらに勞働手段と勞働對象とに區別される。農業に於ける勞働手段の基本的なるものは申すまでもなく土地であり、さらにこれについでは役畜、農具、肥料等が主要なもののうちに数へられる。勞働對象としては、種苗、育成植物及び飼育動物等が数へられる。これらの生産諸力は、農業生産の目的にとつて合目的的な形態において、農業經營の中に有機的に結合せしめられることによつて、具体的な生産力としての力を發揮するものであり、その結果は農産物收獲高の中に実現されるのである。たから、吾々は、支那における農業生産力を分析するに際し、先づこれを構成する要素である生産諸力、即ち勞働手段としての土地、農具、

役畜並びに労働力に関する分析を試みなければならない。

しかるに、これらの生産諸力、二つに大別して生産手段と労働力の結合様式は、當該社會における生産力の歴史的発展段階に應じて夫々特殊な形態をとるものであり、それらの特殊な形態は、當該社會のよつて立てたつ經濟的な基礎構造を決定する。したがつて生産手段と労働力との結合関係は當該社会に於ける基本的な生産関係となづけられるのである。

このやうに、一社會に於ける基本的生産関係は、當該社會における生産力の發展段階に應じて夫々特殊な形態をとり、それは當該社會における爾後の生産力の發展に對する桿杆となるものであるが、ある場合は、逆にこれが生産力の發展に對するフレキシビリテイを失ひ、固定化されることによつて生産力の其後の発展に對する桎梏と化することもありうる。したがつて一社會における社會的生産力の停滞或は減退がみられる場合には、その原因を專ら當該社會における生産関係が既に當該社會における生産力の發展に對する適應性を喪失してゐるところに求められねばならない。

このやうに社會的生産力の發展乃至停滯は、專ら當該社會に於ける生産關係によつて決定されるものであるから、吾々は支那における農業生産力を生産諸力にまでたち入つて、之を分析するに際しても、先づ支那の農業を支配してゐる基本的な生産關係に對する分析から出發しなければならならない。生産力の要素である生産諸力は、生産關係によつてその規模を決定されるものであるから、それは生産關係との關聯において把握されることによつてはじめて合理的に理解されうるのである。ところで、先にも述べたやうに、農業における基本的な生産手段は土地であるから、土地が如何なる形態において所有され、如何にして利用されてゐるかが、農業における生産關係の基本的内容をなしてゐる。(1) したがつて農業における生産關係の分析は、土地所有關係の分析からはじめられねばならない。

支那における土地所有は形式的には一應封建的所有形態から近代的私有形態への移行を殆んど完了したと見做される。支那社會は、しば〳〵アジア的停滯的社會と稱されるやうに、その社會的生産力の發展がきはめて緩

慢であつたため、生産関係の歴史的發展段階の間の前進的な継起がさはめて明瞭であり、しばしば旧時代の生産関係が新たな生産関係の中に根強く残存し、たとへば封建的生産関係の中にも、奴隷制的生産関係は勿論のこと、氏族共同体社會の遺制さへも存續するといふ現象がみとめられた。しかし、支那が世界資本主義の鎖の中にまきこまれてその一環となり、農村の中に商品経済が浸潤してゝるに伴つて、先資本主義的土地所有は漸次に、近代的私有の中に崩壊して行つた。孫曉村氏の言葉をかりるならば、「過去三百年の中國の歴史は、きはめて重要なる農業変化を閲したが、この変化の基本的特徴は、私人による公有地の收奪であつた。疑もなく中國の近代世界貿易との接觸は、この変化を齎した主要な推進力であつた」(2)のである。以下簡單に支那における近代的土地私有の成立過程に一覧を加へることにする。

支那においては清朝末期まで大体左の如き各種の土地所有形態が見られ、その上には一般に封建的收取関係が支配してゐた。

一、宮　荘　　皇帝に属する荘園であり首都北京の近傍に散在してゐた。

二、旗　地　　皇帝が満洲貴族及び軍人に分與したもので、殆んど各省に見られたが、とくに直隸省、河南省に多かつた。

三、寺廟地及び宗教團体所有地　　名儀上は寺院及び宗教團体の公有に属するが事実上は僧侶の私有地とみなさるべきも土地であり、その上に農奴を使役する封建的收取関係が成立してゐた。とくに揚子江流域各省及び山東省、河北省に多い。

四、軍事移民地　　邊境の駐屯軍によつて開拓された土地であり、專ら自營農民としての軍人によつて私有された。

五、同族地　　不可分割地であり同族の成員家族が所有し、主として祭祀の維持を目的とする氏族による共有地である。とくに湖南省、廣東省、廣西省東部、福建省及び江西省の南部に多い。

六、土司地　　中央政府によつて承認され、異種族の酋長が所有する土地であり、西部及び西南諸省に多い。

七、學田　元來は孔子廟がその維持を目的として所有してゐた土地であるが、後に小學校の維持を目的とするものになつた。

八、官有地、　中央政府、各省政府或は縣政府に屬し河川の堤防、湖岸の蘆葦地、新しい浸水地及び木懸の不毛地等種々の形態がある。

九、家族の私有地――これは、封建的大土地所有者によつて私有され、封建的收取関係の支配下にある土地と、自營農民の私有地とからなる。

清朝初期の調査によれば、當時支那には七億畝の耕地があり、そのうち官莊と官有地とが二七、二四%、寺廟地が一三、五七%、軍事移民地が九、一九%をしめ、同族地と家族の私有地が五〇%をしめると評價されてゐた。(3)しかるに、それ以後官莊及び官有地はいふまでもなく、同族地でさへも徐々に私有地に変化して行つたのである。官莊は、一九一一年の革命當時悉く滿洲貴族或は有力な漢人の軍人によつて纂奪され、旗地も有力な軍人或は官吏の所有に移された。さらに革命後、寺廟地、學田、軍事移民地及び其他の形態の官有地のうち殺しい部分が、官吏、豪紳の手によつて非合法

的に賣却された。

最後に族田であるが、これは現在でも南支那においては、その土地の著しい割合をしめてゐる。たとへば、廣東省における族田の總耕地中にしめる割合について、ボーリン及びヨールクは、種々の資料を綜合して、廣東省における全耕地の三割乃至四割が血族の所有地であり、これらの土地から上る貸地料は一億乃至一億五千万ドルに上ると断定してゐる。(4) さらにタルハーノフは廣西省八縣の調査から、農民的所有地が全耕地の平均二一、四%、地主的所有地が五二、一%、氏族所有地及宗教團体の土地が二〇、七%、國有地が五、八%であると報告してゐる。(5) 南支那に廣汎に殘存する氏族共有地に関しては、陳翰笙氏、カルプ氏等による詳細な調査報告がある。(陳翰笙、廣東省に関する調査、カルプ、南支厚壁村に関する調査)

しかしながら、右のやうな氏族的土地所有形態は、現在ではたんに一の法律的擬制にすぎず、實質的には、このやうな古い土地所有形態の下にも既に久しい以前から新たな社会関係が発生してゐるのである。血族の所有

地から上がる収益は、現在では、いたるところで血族内の権力者の私するとなり、彼に対して高利貸的活動の資金を提供してゐる。即ち氏族共有地は、実質的には殆んど血族内の権力者の私有地と化し去つてゐるのである。孫晩村氏は「一般的に云へば、同族地でさへも、少数の管理者の実質的管理下に入り彼等はそれを殆んど私有地として扱つてゐる」(6)と述べてゐる。

一九三一年、中央研究院、社会科學研究所において無錫の土地所有内係を調査した結果、土地の分配状態は次の通りであつた。(7)

官有地	〇・四八%	寺廟地	〇・三二%
祭田	七・八一%	個人私有地	九一・四九%

この割合を、さきに掲げた清朝初期の調査の結果と比較するならば、官有地及び公有地が最近三百年の間に、殆んど尽て個人の私有地に変ぜしめられたことが明かとなる。

以上に述べたやうに、現在では、封建的或は氏族的土地所有形態としての官公有地は殆んど尽て私的所有地の中に崩壊し去り、後者が土地所有の

支配的形態となつてゐるのである。しかしこのことは、これらの私的所有地が完全に実質的に、近代的な、即ち排他的獨占的な所有權の下にたち、土地の商品化が完成されてゐることを意味するものではない。況や、これらの私的所有地は、封建的な收取関係を排除して、その上に資本主義的な借地農関係を成立せしめてゐるのでもなく、或は完全な農民的經營を成立せしめてゐるのでもない。そこには幾多の封建的土地所有の残滓が存續して、土地の完全な商品化を妨げてゐると共に、封建的收取関係は根強く残存して土地の資本主義的な利用を阻止し、農業の資本主義的発展の途を遮断してゐるのである。

以上のやうに私的土地所有は幾多の封建的残滓を存續せしめ、土地商品化の完成を阻止してゐるにも不拘、現在、支那においては、これらの私的所有に委ねられてゐる土地は、大部分地主の掌中に集中されてゐる。これらの地主の私有地は、先にも述べたやうに、專ら清朝壞滅の前後に、官公有地の收奪によつて成立したものであるが、其後自營農民の土地喪失過程

り進行するに伴つて、之を併呑することにより著しく擴大されたのである。即ち商品経済の農村侵入に伴ふ農家家内工業の農家からの分離、農家の購入する工業生産品と農家の販賣する農産物との間の不等價交換、商業高利貸資本の苛酷な收取、さらにこれらの経済的諸原因に加ふるに、各種税捐の増徴、軍閥による強制徴用、頻発する天災内乱等によつて、自營農民と之に中農、貧農層の土地喪失過程は急速に進行したのであるが、この過程は同時にその反面において、地主及び富農の掌中への土地所有集中の過程に外ならなかつた。支那における富農が自營農民として特殊な地位に立ち、むしろ著しく地主的な性格をとるにいたつてゐることは後述する通りである。以下、地主の掌中への土地所有の集中狀態を明かにするために、土地所有の農家各階層の間における分配狀態を二、三の資料によつて考察することにする。

先づ薛暮橋氏が、内政部によつて發表された察哈爾、綏遠、青海、河北、河南、山東、山西、陝西、甘肅、江蘇、浙江、安徽、湖北、湖南、廣東、

廣西、雲南の十七省にわたる土地配分状態を綜合して作成した表を掲げるならば、所有地廣狭別農家階層間の土地所有の配分状態は次の通りである(ぴ)

	戸数	所有新地
一〇〇〇畝以上	一・六三%	一八・五二%
五・一―一〇〇畝	五・〇三%	一九・五五%
三―五〇畝	一〇・二八%	二二・〇〇%
一―三〇畝	二六・二二%	二一・九八%
一〇畝以下	五六・八四%	一五・九七%
公有耕地		一・九八%
合計	一〇〇・〇〇%	一〇〇・〇〇%

右表から吾々は、支那に於ける土地が如何に大規模に大土地所有者の許に集中されてゐるかを知ることが出来る。支那の一畝は、日本の六・一九五二畝に當る。一〇〇畝以上即ち大町一反以上の大土地所有は總戸数の僅か一・六三%に過ぎないにも不拘、總耕地の一八・五二%を所有しており、逆に、

大

総戸数の五六・八四%と過半数をしめてゐる一〇畝以下即ち大反一畝以下の零細土地所有者は、僅かに總耕地の一五・九七%を所有してゐるに過ぎない。しかし、以上のみを以てしては、地主の掌中への土地集中の状況を明かにすることは出来ない。そこで、いま農村復興委員会その他の機関による、陝西、河南、江蘇、浙江、廣東、廣西の六省に関する調査報告（一九三三年）にもとづいて、各階層農家の土地所有分配の一般的状況を推定した蔀暮橋氏の表を掲げるに次の如くである。(9)

	戸数	耕地
地主	三・五%	四五・八%
富農	六・四%	一八・〇%
中農	一九・六%	一七・八%
貧農	七〇・五%	一八・四%
雇農		

右の表から、支那における土地所有が一握りの地主及び富農の許に大規模に集中されてをり、農民の大多数をしめる貧農及び雇農がいかに零細な

る土地所有を餘儀なくされてゐるかが明瞭となる。總戸數の一〇%にも充たない地主及富農が總耕地の六〇%以上を所有し、總戸數の七〇・五%と農家中にあつて壓倒的多數をしめる貧農及び雇農は僅かに總耕地の一八・四%を所有してゐるに過ぎない。

さらに今一つの、陶直夫氏によつてなされた支那における土地分配の推定表を掲げよう。陶氏は、各方面の調査、報告、その他の諸材料にもとづいて、支那全國の現有耕地を十四億畝と算定し、この耕地と直接所有関係にある農家戸數を六千万戸と見做し、次のやうな推計を試みてゐる。(10)

	農家戸數（單位千戸）	同上百分比	所有耕地面積（單位百万畝）	同上百分比
地主	二、四〇〇	四	七〇〇	五〇
富農	三、六〇〇	六	二五二	一八
中農	一二、〇〇〇	二〇	二一〇	一五
貧農	四二、〇〇〇	七〇	二三八	一七
雇農				

合計	六〇、〇〇〇	一〇〇	一、四〇〇	一〇〇

この推定は、さきにあげた孫曉村氏の推計ときはめて近似した数字を示している。陶氏は右の結果を、たんに一般的問題の基点を指適したに過ぎないといつてゐるが、その基点とは、とりも直さず農村人口中一〇%をしめるにすぎない地主及富豪が全耕地の六八%までを独占しており、農村人口の絶対多数（九〇%）を形成する中農、貧農及び雇農の所有する土地が僅かに全耕地の三分の一をしめるにすぎないといふ事実である。

よりたち入つて土地所有の地主の掌中への集中状態を明らかにするために、以下、吾々は、北支と南支とに分つて土地所有の配分状態を観察しよう。支那に於ては、一般に南支には水田による稲作を中心とする経営が行はれ、北支には畑地における麦作を中心とする雑穀の栽培が支配的なのであるが、南支の水田は北支の畑地よりも肥沃度高く、単位耕地面積当り収量もより大きく、したがつて地主の掌中への土地所有の集中は、北支におけるよりも著しい。そこで、一般に、地主の掌中への土地所有の集中は南

支に於てのみ特徴的な現象であり、北支においては専ら農民的土地所有が支配的であり、地主の掌中への土地所有の集中過程はきはめて緩慢であるといはれてゐる。しかるに、左に掲げられた、保定（河北）、輝縣（河南）、綏德（陝西）、忠留（山西）に於ける調査の結果は、北支においても、地主の掌中への土地所有の集中が、南支ほど顯著ではないにしても相當程度に進行してゐることを物語つてゐる。(11)

北支四縣における各階級間の地權分配

縣名	地主 戶數	地主 土地	富農 戶數	富農 土地	中農 戶數	中農 土地	貧農 戶數	貧農 土地
保定（河北）	三・六〇%	一三・四〇%	八・〇〇%	二六・九〇%	二三・一〇%	三二・八〇%	六五・二〇%	二五・九〇%
輝縣（河南）	四・三九	二六・五〇	八・〇八	二〇・六〇	二四・六一	三三・九四	五六・九七	一六・八三
綏德（陝西）	一・四六	一六・九一	三・三一	二二・八六	一一・四〇	二八・四〇	八三・八二	三一・八三
忠留（山西）	〇・三〇	二四・二九	一・八二	五・四三	六八・三三	六一・四三	二九・五五	八・八五

一般的に見るならば、北支においては、人口の三%乃至四%をしめる地主が土地の二〇%乃至三〇%を所有し、他方人口の六〇%乃至七〇%をしめる貧農は僅かに土地の二〇%乃至三〇%を所有するにすぎない。即ち、一般に農民的土地所有が支配的であり、地主的土地所有がさはめて乏しいと見られてゐる北支においてすら、土地所有の地主の許への集中と自営農民の土地喪失の過程とは相當の程度で進行してゐるのである。

南支においては、事態は一層尖鋭化されてゐる。いま浙江、廣東、廣西、雲南の各省における調査結果を一括表示すれば次の如くである。(12)

南支四省に於ける各階級間の地權分配

省名	地主 戶數	地主 土地	富農 戶數	富農 土地	中農 戶數	中農 土地	貧農 戶數	貧農 土地
浙江	三・三%	五三・〇%	二・七%	八・〇%	一七・〇%	一九・〇%	七七・〇%	二〇・〇%
廣東	二・〇	五三・〇	四・〇	一三・〇	一二・〇	一五・〇	七四・〇	一九・〇
廣西	三・四	二八・九	六・四	二二・三	二〇・六	二八・〇	六九・六	二〇・八
雲南	四・四	二六・九	三一・二	三八・七	一	一	六四・四	三四・四

即ち、浙江省に於ては、僅かに總戸数の三・三%をしめるにすぎない地主が土地の五三%を所有し、總戸数の七七%をしめる貧農は僅かに土地の二〇%を所有するにすぎない。廣東省においても、總戸数の僅か二%をしめるにすぎない地主が土地の五三%を所有し、總戸数の七四%をしめる貧農は僅かに土地の一九%を所有するに過ぎない。以下廣西省、雲南省においても同様に、地主の掌中への土地所有の著しい集中がみとめられる。

以上において、吾々は、支那における土地所有が、南支北支を通じて、大規模に地主の掌中に集中されつゝある事実を確認した。支那においては、既に基本的な土地所有形態は、地主的所有のそれであり、農民的土地所有はむしろ二次的な意義を有するにすぎないと云っていい。それでは、以上のやうにして地主の掌中に大規模に集中された土地は、如何なる形態で利用されてゐるのであらうか。

一般に、土地所有の集中は、一定の歴史的社會的條件の下にあつては、資本主義的大規模經營の成立に対する前提となるものである。即ち、一方

において、階級社会の中に資本主義発展のための前提諸條件が成熟し、工業の資本主義化が行はれ、人口の都市集中の過程が進行して、こゝに農産物に対する厖大な市場が形成され、資本主義的大規模農業経營に対して大量の利潤獲得の機会が開かれるとともに、他方において、土地所有に対する資本の力が強化され、資本が土地所有から封建的收取関係を完全に排除し、小作人の勞働の全剰余部分を含む封建的地代をば利潤の成立を可能ならしめる限度にまで引下げることによつて、資本の農業生産部門への導入が可能とされることを前提とするのである。以上のやうな歴史的社会的條件の下において、集中された大土地所有の地盤の上にたつ農業の資本主義化は、歴史上二つの古典的な形態をとつて、英國及びドイツにおいて完成された。即ち、英國においては、大土地所有に対立する資本主義的借地農經營の成立によつて、ドイツにおいては、封建的大土地所有者自体によつて行はれる資本主義的大經營の成立によつて。

いふまでもなく、支那においては、右のやうな條件は成立を見なかつた

のであるが、その理由は専ら、支那経済社会の半封建性と、半植民地性との中に求められるのである。先づ、支那における資本主義は半植民地的な特殊性を有しており、正常な、自主的な発展をとげることができなかつた。即ち、一八四二年の阿片戦争における敗北を契機として帝國主義列強の圧迫の下に世界資本主義の鎖の中にまさこまれて以来、支那はたえず列強帝國主義資本による植民地再分割闘争の対象となり、列強帝國主義資本は、或は産業資本の投下によつて直接に、或は貨幣資本の貸附けによつて間接に、支那における殆んど凡ての近代的産業部門、とくに鑛山業、重工業、鉄道業等の重要産業部門を獨占した。従つて、支那民族資本にとりては、産業部門において自由に発展する機會は全く喪はれ、彼等は、或は買辨資本として列強帝國主義資本に従属するか、或は商業資本、高利貸資本として農民の経済に寄生するか、何れにせよ、寄生的、腐敗的な役割を演ずるの他なかつたのである。このやうに畸形的な形態をとることを余儀なくされた支那民族資本が、農村における土地所有を支配して封建的関係を完全

に解体させ、その上にたって自由に資本主義的農業経営を展開する力を有しえなかつたことはいふまでもない。むしろ支那民族資本は、買辨的商業資本或は高利貸資本として、直接間接に、以下に述べられるやうな、農村に残存する半封建的土地所有の圧力の下にあつて窮乏した農民大衆の中に、好適な收取機會を見出す寄生的な存在と化し去つてゐたために、彼等は農村における半封建的土地所有関係に対しては、逆に之を維持し、強化することに利益を見出してゐた。

さらに又列強帝國主義資本は、支那の農業の中に専ら自己の必要とする原料の豊富な資源を発見し、之を支配しやうと試みたのであるが、この場合綿等は、農村における半封建的土地所有関係を解体させ、農業生産過程の中にくひ込んで自ら資本主義的農業経営を営むことなく、むしろ農村における半封建的土地所有関係を維持しつゝ、買辨的商業資本を手先として、窮乏農民との植民地的掠奪的な取引によつて有利に原料を獲得する途をえらんだのである。

従つて、さきにも述べたやうに土地の地主の掌中への集中が大規模に行はれてゐるにも不拘、土地所有関係の中にはいまなほ封建的遺制が根強く残存し、支那の農村における土地所有関係に半封建的な性格を刻みこんでゐるのである。そして、このやうな土地所有のもつ半封建的性質が、今度は逆に農村への資本の導入に対する著しい障害物となつてゐることはいふまでもない。

以上において、吾々はしばしば支那における土地所有関係を半封建的とよんできた。そこで、以下においては、支那における土地所有関係のもつ半封建的性格を明瞭にするために、支那における小作制度についてたち入つた考察を試みたいと思ふ。

支那における小作制度にはだいたい次の五つの形態がある。

一、永小作制　東南各省、たとへば江蘇、浙江、福建、廣東等の各省においては、現在もなほ一種の永小作制度が行はれてゐる。この制度の特徴は、土地所有権が二つの部分、即ち「田底」権と、「田面」権と

に分割されてゐることである。地主は田底を占有してゐて小作農から地代をとりたてる権利があり、小作農は田面を占有してゐて土地の使用権を永代にわたつて保持する権利がある。小作農家が地代を支拂はぬ場合のほかは、地主には小作を撤廃する権利がない。田面権を占有する永小作農民は、自ら耕作することを欲しない場合には之を賃貸或は賣却することが出来、この場合地主は普通之に干渉する権利をもたない。このやうな永小作制と土地の分割的所有権との存在は、支那における土地所有がいまなほ封建的性質を完全に脱却せず、土地所有の近代化即ち土地の完全な商品化が行はれ難い状態にあることを示すものである。マジャールは、江蘇省南部の調査の結果、小作地の八〇・九%が永小作であり、一七・八%が三年期限の小作であり、一一・二%が五年期限の小作であつたこと、さらに廣西省東部七縣においては、長期小作が小作関係全体の二・二%、短期小作が一八・七%、永小作が七〇・一%をしめてゐたことを指摘し、「以上の関係はすべて資本主義的な自由な

土地所有と何等の共通点をもたないものであつて、それはあらゆる土地所有形態の資本への従属を打建てることはできなかつたし、今後もできないであらう。むしろそれは、資本の土地所有への浸透、したがつて農業への浸透を一層阻害し、困難ならしめるのである。」(13)といつてゐる。いふまでもなく、農民経済の一般的衰退、農村における貨幣の権力の増大、高利貸の権力の増大に加ふるに、租税の増徴、天災の頻発、内乱等によつて、右のやうな小作農の土地に対する不可分の権利の地主の掌中への移行過程は促進せられ、小作関係の新しい形態は、徐々に農村に侵入しつゝあるのであるが、しかしいまのところでは、なほ伝統的な永小作形態が優勢であり、支那中部の江蘇、浙江、安徽の各省においては、「共同的土地所有が優越してゐるのである。

二、分益小作制　分益小作制は全國各省にわたつて廣汎に行はれてをり、収穫の一定割合を地主への地代支拂にあてることを特徴とするのであるが、これには二種の相異つた形態が區別される。第一の形態は

西北各省、たとへば山西、河南、陝西等の諸省に廣く行はれてゐる所謂「二八分種」制であり、この場合、小作農は「田面」権を所有しないばかりでなく、役畜、農具、種子、肥料等の生産手段をも悉く地主から供給され、收穫の二割を自己の手許に保有し、八割を地代として地主の許に納めるのである。即ちこれは一種の変態的な産備労働と見做されうるものである。第二の形態は、地主と小作とが生産手段を折半して出し合ひ、收穫をも両者の間に折半するもので最も典型的な分益制である。第三の形態は、一切の生産手段が小作農によつて供給され、たんに收穫が一定の比率で両者の間に分配されるもので、定額物納地代制と殆んど區別がない。

三、定額物納地代制……これは全國各省に最も普及してゐる小作制度であり、分益制度と異り、小作農が生産手段を全部負担し、地代額が地主小作の双方によつて豫め協定され收穫の農凶によつて影響されない。

四、金納地代制　これは大都市附近の商品作物地域に盛であるが、たんに地代が貨幣形態をとつてゐるばかりで、その内容は定額物納地代と殆んど異らない。さらに大都市附近には通常「折利」制度なるものが行はれてゐる。これは納付すべき穀物の市價に應じて割出された貨幣額を地代として支拂ふものであり、物納地代から金納地代への過度的形態とみなされる。

五、勞働地代制　これは、勞働力を以て地代支拂にあてるものであり、典型的な封建的地代形態である。支那においては、現在もなほ、このやうな封建的地代形態が少數の地方に存在してゐる。たとへば、最も典型的なものは、江蘇省宝山縣に廣く行はれてゐる「聊塞」である。即ち「聊塞」は、地主から田地一畝をかりる毎に、之に対して年に二十五日乃至三十日分の勞働地代を支拂はねばならないのである。さらに河南省等に廣く行はれてゐる「送工」も一種の勞働地代であり、小作農は物納地代の他に余分の労役負担を負うてゐるのである。

中央農業實驗所の、支那の小作制度を、分益制、穀物地代制、金納地代制の三種に分類した調査によると、分益制は二八、一%、穀物地代制は五〇、七%、金納地代制は二一、二%をしめてゐた。(14) 即ち、支那においては、いまなほ封建的な地代形態である物納地代制が現在においても支配的な地代形態となつてゐるのであり、資本主義的地代形態たる金納地代制は著しく未発達の状態にある。さらに労働地代制の残存、永小作制及び分益小作制の相當廣汎にわたる存在等を考慮するときは、支那における土地所有がいまだに著しく封建的性質を保持してゐることを知ることができる。

さらに、支那における土地所有の封建的性質は、全剰余労働部分を包含し、小作人の手許にたゞ最低限度の生活資料をしか残さない程の高率な地代收取の中に最も明瞭に示されてゐる。國民政府主計處の統計によれば、地代の全收穫高中にしめる割合は次の如くである。(15)

上等地　　中等地　　下等地

分益地代	水田	五一・五%	四八・二%	四四・九%
	畑地	四七・八%	四五・三%	四三・七%
定額地代	水田	四六・三%	四六・一%	四六・二%
	畑地	四五・四%	四四・六%	四四・三%

こゝに注意すべきことは、小作農の取得部分の中には、種子、肥料、農具、役畜等の生産手段部分までが含まれてゐることで、これを除くならば、残るところは彼等の一家族の最低限度の生活を維持するにも足りない程度のものであることである。このやうな高率の地代は支那における小作関係の半封建的な性質を最も明瞭に示すものである。このやうな場合にあつては、利潤の成立の余地は全然残されず、土地所有の中に資本の入り込む機會は著しく制限を蒙らざるを得ない。さきにものべたやうに、この場合には、資本は土地所有を支配し、之を解体せしめるよりも、むしろ半封建的な地代收取関係の下に窮乏した農民の間に好適な收取機會を見出して、逆

にこのやうな半封建的関係の維持強化をはからんとする傾向をもつのである。

農村における半封建的收取関係の存續は、いふまでもなく、收取對象としての半封建的小作農民の存在を前提とする。さきにも述べたやうに、支那においては、その社会のもつ半植民地的特殊性のために、工業における資本主義の発展はきはめて微々たるものであり、資本の蓄積もきはめて乏しかつた。したがつて支那の工業は農村における半封建的收取関係の圧迫の下に窮乏した多数の農民に対して、充分な就労機会を提供することができなかつた。したがつてこれらの窮乏農民は、農村をはなれて都市工業の賃銀労働者に転化することができず、やむなく依然として農村に滞留して半封建的な高率の地代收取の下にも小作農としての存在をつづける他に生きる途がなかつた。かうして農民の多くは窮乏のあげく高利貸的地主に対する債務農奴的関係に陥つたのであるが、彼等は、この関係によつてますますかたく土地に緊縛され、土地を離れて賃銀労働者となる自由をますま

喪失した。かうして支那の農村にはたえず厖大な窮乏農民が再生産されてをり、これらの農民は半封建的收取にとつて好個の土壌を形成してゐる。

以上述べたやうに支那における資本及び土地所有の両者の側に存する歴史的社會的な條件――即ち半植民地性と半封建性――は相互規定的な関係において作用し、土地所有の資本主義的形態への發展に対するデットロックとなり、農業における資本主義の發展を著しく阻止するにいたつてゐる。

一般に支那においては、地主と資本家とは一人格の中に統一されてゐることがきはめて多く、さらに地主は殆んど凡て官吏或は豪紳であり、かくしてこゝに地主、商業高利貸、官僚の三位一体が成立してゐる。このやうな農村における三位一体は中央政府の中に統合されて、支那に特有な集權的官人支配体制を形成してゐるのであるが、この農村における三位一体支配体制こそは、支那の農業における資本主義の發展を阻止し、支那の農業を依然として中世的な停滞性の中に埋没せしめるモメントとなつてゐるとともに半封建性と半植民地性の相互規定的関係の基軸となつてゐるのであ

る。右のやうな支那における地主の性格について、陳翰笙氏は、たとへば次のやうに述べてゐる。「現在の支那の地主は、フランス革命當時の地主とは異つてゐる。彼等は大体において四位一体である。彼等は小作料收納者であると同時に商人であり、高利貸であり、行政官理である。多くの地主は高利貸を兼営してをり、地主兼商人にもかはりうる。同時に多くの商人、政客たちは地主になる。地主の大半は、釀造所、搾油所及び穀物倉庫等を経営してをり、又一方倉庫経営者及び雜貨店の主人も土地の抵當貸付けをやり、實際における土地の主人である。また地主の所有してゐる質屋及び商店等は軍人、官吏の銀行と相互の聯関をもつてゐる。かうしたことは実際においてかくしおへない事実となつてゐる。(16)

たとへば、いま、江蘇省における一千畝乃至大万畝の耕地を所有してゐる地主五一四戸について、陳翰笙氏が調査した結果によるならば、そのうち三七四戸の大地主は、左の表の示す如く、いづれも他に主要な職業をもつてゐた。その他の一四〇戸の大地主は、いかなる職業に携つてゐるか不

明であつたが、純粋に地代のみで生活してゐる者は、その数きはめて少いものとみられる。(17)

		軍人、政客、官吏	高利貸	商人	工場経営者	計
江蘇南部	戸数	四四	六九	三六	一二	一六一
	百分比	二七・三三	四二・八六	二二・三六	七・四五	一〇〇・〇
江蘇北部	戸数	一二二	六〇	三一	一	二一三
	百分比	五七・二八	二八・一七	一四・五五	一	一〇〇・〇

右の数字は支那における地主、官吏、商業高利貸資本の三位一体的支配を明かにするものである。

以上述べられたところから、吾々は、支那においては地主の掌中への著しい土地所有の集中が見られるにも不拘、この集中された土地の上に経営の集中が殆んど見られない理由を理解することができると思ふ。耶ち支那

においては、地主は自らの所有する殆んど凡ての土地を自ら経営することなく、之を細分して小作人に貸與し、專らそこからえられる半封建的な高率な地代收入に依存して生活する寄生的存在となり了つてゐる。彼等の掌中に蓄積された地代收入は、農業生産部門に還流して農業生産の改善に利用されず、農業生産力の發達を促す作用を營むことなく、專ら商業高利貸資本として、生産過程の外部から農民經濟の窮乏につけ入つて、封建的收取を強行し、彼等農民をますます窮乏の中にかりたて、土地喪失の過程を促進し、かうして、ますます多くの土地を支配するとともに、その上に再び半封建的收取関係を再生産する。かやうにして、農村にはたへず半封建的生産関係が維持され、農業の資本主義化への途は遮断される。こゝには無限の悪循環がくりかへされるばかりであり、農業生産力は半封建的な停滞性の中に埋没されるの他ない。

無錫における土地所有權の集中に関する王寅生、錢俊瑞両氏の報告は、次のやうに述べてゐる。(8)「無錫の地主は、中國のどこでもと同じく、田プ。

ロシアのエンゲルのやうにその土地を経営しない。かれらはその收租田を貸して租出するのみでなく、自田の大三%を租出する。そして事実、地主の所有地が多ければ多いほど、かれらの租出する土地の割合は大きい……」

「實際、田租收入はすべて土地購入、高利貸付け、商業資本に使用され、産業目的にはごく僅かしか残されない、最も普通の田租の放出先は高利貸付けである。どんな村でも少くとも地主の四〇%はこの利益で繁栄し、多くの場合この割合は九〇%乃至一〇〇%である。總じて地主の約三分の一は商業に投資してゐるが、僅か一・二九%が近代的工場へ投資してゐるにすぎない。」

さらに、以上のやうな農業における半封建的生産関係にもとづき、小作料が著しく高率であり、土地の經営から上る利潤よりも、土地の貸付による小作料收入の方がはるかに大きいために、富農層においても、自己の所有する土地の一部を小作地として貸出して、多かれ少かれ地主的な存在となしてゐるものが極めて多い。このやうな富農の寄生的地主への轉身とい

小事実を明かにするものは左に掲げる一九二九年の江蘇省無錫縣の統計である。(20)

	使用土地	賃借土地	賃貸土地
富農	一八・七%	九・二%	五六・七%
中農	三〇・四%	二一・五%	二四・二%
貧農	五〇・九%	六九・三%	一〇・一%
合計	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%

即ち右の統計によるならば、富農によつて使用される土地は、使用土地の總面積の一八・七%にすぎず、中農及び貧農の三〇・四%及び五〇・九%に比して著しく少い。逆に賃貸される土地に関してみるならば、富農によつて賃貸されてゐる土地は、その五六・七%をしめ、之に比して中農及び貧農によつて賃貸されてゐる土地は僅かに二四・二%及び一〇・一%にすぎない。

さらに無錫縣の代表的二十ケ村における富農の土地について、賃貸地の

割合をみるならば、次表の如くである。(21)

所有耕地	戸数	耕地總面積	賃貸地面積	百分比
一六畝以下	二二	一八一・〇	一・五	〇・八三
一六―三一・九畝	二九	六六七・一	八〇・四	一二・〇五
三二畝以上	七	三五八・二	一四三・三	四〇・〇一
計	五八	一、二〇六・三	二二五・二	一八・六七

右表から、吾々は、富農の所有する土地が多ければ多いほど、その賃貸する部分の割合も大きくなり、彼等がますます地主に転化して行く傾向をうかがうことができる。

さきに引用した王寅生、錢俊瑞両氏の報告には次のやうに述べられてゐる。(22) 「……さらに現在の状況では、富農でさへ、その所有地の一部分を租出するのを有利とするのである。……ことの眞相は、中國の労働

はじめて安く、農地は零細化され、分散されてゐるので富農は機械を採用できぬし、又希望もしないといふことだ。……農業からの利潤は、たゞ重税、兵差の強制、世界市場による價格操作原始的技術自体によつて引下げられる。これら凡てのことが、富農が田租徴收のために、その土地の一部分を租出する希望を説明する。そして彼等は、農業利潤をあげるよりもこれの方が安全だと考へるのである」

支那における富農は、かやうにして、大規模農業経営者として農業生産力の発展に寄與すべき進歩的役割を放棄し、生産部門から退いて寄生的地主に転化しようとしてゐるのである。

以上において、吾々は、支那における基本的な農業生産関係たる土地所有関係に附着する半封建的性質が、いかに支那における農業生産力の発展に対する桎梏となつてゐるかを明かにしたと考へる。そこには、全剰餘労働部分を包含する高率なる半封建的地代收取関係が基軸となり、半封建的商業高利貸的地主と半封建的零細小作農とが、この基軸を中心として相互

對立を内包しつゝ統一されてゐるのである。そして前者は農業生産への直接的参加から離れて、専ら地代收取のみに依存する寄生的存在であつて、既に農業生産力促進のための進歩的役割を放棄しており、農業生産の主要なる擔當者である後者は、勞賃部分にさへくひ込む高率の小作料に圧迫されて、農業生産力を増大せしめるための資本の蓄積は思ひもよらない状態にあつた。

先にものべたやうに、以上のやうな地主的土地所有に比するときは、農民的土地所有は、支那の農業においてはすでに副次的な意義を有するにすぎないものであるが、このやうな獨立農民層においても、中以下の階層は、租稅の増徵、商業高利貸資本の收取、戰爭、天災等によつて、ますますその有する零細なる土地を喪失して小作農への轉化の過程をいそいでゐるし、上層部たる富農は先にも述べたやうに、ますます農業生産の担當者たる役割を放棄して、寄生地主的存在に轉化しようとしてゐるのである。

（註）

(1)「工業上の生産を支配する関係中機械の所有及使用が第一に重要な要件であると同じに、農業上の生産を支配するものの中では、土地の所有及使用は最も重要な地位をしめる」――陳翰笙「廣東農村生産関係與生産力」邦訳、南支那農業問題の研究、井出季和太訳P四、

(2) 孫曉村「現代中國的土地問題」邦訳杉本俊朗訳「中國農村問題」P、一七

(3) 孫曉村前掲論文邦訳P、一八

(4)、(5) マジアール「支那農業経済論」井上照丸邦訳P、一九四

(6)、(7) 孫曉村前掲論文邦訳本P、一八

(8) 薛暮橋「中國農村経済常識」邦訳氷沢秀夫「支那農村経済概論」P、三〇

(9) 薛暮橋前掲書邦訳本P、三一

(10) 陶直夫「支那現段階の土地問題」（中國農村経済研究会編「中國土

地問題と商業高利貸」）邦訳堀江邑一「現代支那の土地問題」P、六二

(11) 孫曉村前掲論文、邦訳P、一九

(12) 仝　P、二〇

(13) マジアール前掲書邦訳本P、三一八

(14) 薛暮橋前掲書邦訳本P、五〇、

(15) 仝　P、五三

(16) 陳翰笙「現代支那の土地問題」（中國農村經濟研究会編「中國土地問題と商業高利貸資本」所收）邦訳本P、二七

(17) 陳翰笙前掲論文邦訳本P、二八

(18) 王寅生、錢俊瑞其他「土地分配と資本の將来」邦訳杉本俊朗訳「中國農村問題」P、二六

(19) 薛暮橋前掲書邦訳本P、三六

(20) 陳翰笙「現代支那の土地問題」邦訳本P、三二

(21) 王寅生、錢俊瑞前掲論文、邦訳本P、二六

二、生産諸力

吾々は上(ニ)に於て支那の農業における基本的生産関係たる土地所有関係について些かの分析を試みた。そこで明かにされたことは

(イ) 支那社會が列國帝國主義資本の主導の下に資本主義的発展の途を辿り、商品経済が農村に浸潤してくるに伴つて、前資本主義的土地所有即ち封建的或は氏族的土地所有は漸次に近代的私的所有の中に崩壊して行つた。

(ロ) 右のやうな近代的私的土地所有の成立とともに、土地所有の地主の掌中への集中が進行し、自營農民による農民的土地所有は急速に地主的土地所有に移行して行つた。

(3) しかるに、現在における土地所有の支配的形態たる地主的土地所有は、一應近代的私的形態をとつてゐるにも不拘、たとへば分割的土地所有権、永小作制、物納地代等の中に封建的残滓をとゞめてゐるとともに、何よりも地代額について見れば、それは全剰余労働部分を包含する封建的地代であり、従つて支那における土地所有関係は最も適切には半封建的と規定されうるものであること。

(4) 右のやうな半封建的土地所有関係の支配は、農村への資本の流入を阻止するとともに、地主、富農をして専ら地代収取のみに依存して農業経営の直接的擔當者としての役割を放棄せしめ、農業経営を専ら高率の地代負担の下にたつ零細小作農の手中に委ねることによつて、農業における資本主義の発展を阻止し、農業生産力をして依然として中世的な低水準に停滞せしめてゐること。

以上の如き諸点であつた。

以下における吾々の課題は、(二)における分析の結果、「資本主義的な発展

を阻止され中世的な低水準に停滞せしめられてゐる」とされた支那農業における生産力に関して、その要因をなしてゐる生産諸力即ち生産手段と労働力にたち入つた分析を加へることによつて以上の立言を確認するところにある。

（一）に於て述べたやうに支那の農業においては、半封建的な土地所有関係が支配し、地代は全余剰労働部分を蔽ひつくす程の高率であつたから、地主は自己の掌中に集中された土地を利用するに際し、之を自ら経営するよりも、むしろ之を細分して貧農に小作せしめ、専らそこから得られる小作料収入に依存することのうちに利益を見出してゐた。そして彼の前には、どのやうな劣悪な條件の下においても尚、一片の土地を借り受けやうとしてその機会を待ち求めてゐる窮乏農民が廣汎にわたつて存在してゐたのである。支那における農民は、窮乏に迫られてその土地を喪失する場合にも、工業における資本主義が、その半植民地的性格に災されてさはめて未発達の状態におしとゞめられてゐたために、工業部門の中に就労機会を求める

ことができず、やむなくどのやうな劣悪な條件の下にも農村にとゞまつて、零細なる土地の上に小作農としての生存をつゞけるの他なかつた。以上のやうな関係こそが、支那における耕地の細分化される原因となつてゐるのである。したがつて支那における土地利用は、土地所有の著しい集中状態に比して著しく分散的な状態にあり、大規模経営は殆んど見られず、専ら零細経営が、農業経営の支配的形態となつてゐるのである。トーニー教授は、次のやうに述べてゐる。「土地細分の原因に関しては不明な点はない。それは天然資源と人口との間に存在する関係の当然の結果である。……支那のやうに大きな人口が、既に充分に開拓された、しかも一部の専門家によれば、事実上縮少しつゝありといはれる土地の上に足場を求めんと必死になつてゐる際は、適当な對策が講ぜられない限り、土地が益々細分化されて行くことは免れ難い趨勢であるといはねばならぬ。」(1) しかしこの説明は不充分なやうに思はれる。こゝでは支那における土地細分化の原因は、専ら、たんに土地資源と人口数との数学的不均衡に帰せしめられてゐるばか

り、、傾向にかくも大きな人口が、かくも貧弱な土地資源の上に足場を求めねばならなくされてゐるかといふ点に関しては一言も觸れてゐない。人口数と土地資源との不均衡は、決して人口自体のもつ絶対的な性質ではない。一定の歴史的社會的條件――支那社會の半植民地性及び半封建性――の下においてのみ、人口は土地に比して均衡を失ふほど多数となつたのである。

さて、右のやうな経営面積の零細性は、その上に行はれる高率の小作料收取関係と相まつて、支那における農業の合理的経営を不可能ならしめ、役畜、農具等の労働手段をも著しく矮小原始的なものたらしめ、大多数の農家をして専ら家族の裸の労働のみに依存する労働集約的経営をとるにいたらしめてゐる。孫曉村氏は支那における農業経営の特質として、

一、経営規模の零細であること

二、賃銀労働者の割合がきはめて少く、しかも質及量においてきはめて特殊性を有してゐること

三、農業における資本の有機的構成がきはめて低いこと。

この三点をあげてゐる。(2) 右に孫曉村氏によつてあげられた、支那における農業経営の三つの特質は、支那における農業生産力を形成する要素である農業生産諸力即ち土地、労働力、労働手段の零細性、原始性を指摘するものに他ならない。以下吾々は、基本的生産関係との関聯の中に、個々の農業生産諸力についてたち入つた考察を試みようと思ふ。

一、土　地

全國経済委員会、財政部、内政部の三機関によつて共同組織された土地委員会による一九三五年の調査によれば、一戸當り平均経営面積は次の如くであつた。(3)

省別	調査縣数	調査戸数	一戸當り平均経営面積（水田畑地合計）（市畝）
察哈爾	一	一、四二八	二〇一・六六五
綏遠	二	三、一〇五	九六・二二九
陝西	一二	六、六五四	二一〇・三九九

山西	二	六、四二五	三五、六〇七
河北	二三	一五八、一〇九	一九、一七一
山東	一八	二三三、〇六一	一四、三三五
河南	一二	一三七、六七二	一七、七五三
江蘇	一二	二一八、一四九	一五、三八二
安徽	一二	一三七、六七二	一五、六六四
湖北	一一	一〇六、五四六	一〇、〇九七
湖南	一四	二四〇、二一一	九、五四二
江西	五	二三、六九七	一〇、一五二
浙江	一五	一一六、二一二	八、八三一
福建	一〇	七九、七三六	八、三六〇
廣東	二	一四、五一三	五、九三九
廣西	二	一二六、七九六	一二、九九八
總平均			一三、九二〇

右表から、吾々は、次の二つの点を指摘することができる。先づ、支那における一戸當り経営面積がきはめて零細であること。――支那における耕地面積單位である一市畝は、日本の六、七二二畝に當る。したがつて右の統計における農家一戸當り平均耕地面積一三、九二〇畝は、約九反三畝に當る。之を日本における平均耕地面積の一町一反弱（農林省全國農家一斉調査、昭和十三年）と比較するならば、支那における農家一戸當り経営面積が、すでに國際的にみて過小農経営として知られてゐる日本に比してすらなほはるかに零細であることが明かにされる。しかも上表においては墾植區域として特殊な條件にある、寒冷爾、綏遠の両省を含めた計算の結果なのである。次に、綏遠省から河南省までの北支麦作地帯と江蘇省以南の南支水田地帯とを比較するならば、一般に北支麦作地帯における農家一戸當り平均耕地面積は比較的大きく、南支水田地帯のそれは、これに比してきはめて零細であることである。

しかし右のやうな平均数は、各層農家の間の経営規模の相違を蔽ひかく

してしまふ。したがつて以下において、吾々は、よくたち入つて経営面積を農家の階層別に観察してみよう。次の表は、農村復興委員会及び廣西良農師範専科學校の調査によるものである。農家階層別に見るときは、一戸當り平均経営面積は、次の如くである。(4)

	廣西	河南	陝西	浙江	江蘇
富農	三〇・九	一四四・七	五三・〇	二五・九	一〇〇・四
中農	一六・六	二八・七	二九・〇	一三・九	一九・八
貧農	五・六	八・五	一〇・〇	五・七	四・六

（單位市畝）

いま、この表を、日本における耕地面積單位たる反に換算して見るならば、次のやうになる。

廣西	河南	陝西	浙江	江蘇

富農	二〇・七	九七・二	三五・六	一七・四	六七・四
中農	一一・一	一九・二	一九・四	九・三	一三・三
貧農	三・七	五・七	六・七	三・八	三・〇

（單位 反）

右の換算表から明かにされるやうに、大略支那における總農家戸数の七〇%をしめる貧農層（(二)）における孫、陶両氏の推定率）において、その経営面積は、廣西、浙江、江蘇等の水田地帶はいふまでもなく、陝西、河南等の麦作地帶においても驚くべき零細性を示してゐる。とくに水田地帶各省においては、四反にもみたない極度の零細規模である。

最後に、中央農業実験所編纂の一九三五年四月の農情報告による全國廿二省における農家経営面積配分表を左に掲げることにする。(5)

全國廿二省における農家の経営耕地面積配分概況

省別	報告縣數	經營面積別農家百分比				
		一〇畝以下	一〇—二〇畝	二〇—三〇畝	三〇—五〇畝	五〇畝以上
察哈爾	六	一四·三	一八·五	一六·一	二八·四	二二·七
綏遠	一一	四·六	五·二	一〇·三	二八·六	五八·三
寧夏	六	一五·六	一三·六	一一·〇	三二·二	二七·六
青海	七	二〇·八	二二·四	一六·六	二七·二	一三·〇
甘肅	二一	二一·六	一八·二	一五·五	二五·八	一八·九
陝西	五一	二四·八	一·九	一五·九	二五·七	一三·七
山西	七八	一八·四	一八·六	一六·五	二八·一	一八·四
河北	一〇七	二六·四	二三·一	一八·〇	二二·九	九·六
山東	八五	三九·三	二三·四	一四·九	一六·四	六·〇
江蘇	四八	四〇·五	三一·二	一一·九	一一·三	五·一
安徽	四二	三五·三	二六·六	一四·二	一四·四	八·五
河南	七三	二九·三	二三·二	一七·一	二〇·八	九·六

湖北	二八	四九・九	三三・九	八・九	五・一	二・二
四川	五九	三九・二	三三・六	一四・二	八・五	四・五
雲南	三一	五八・〇	二九・七	六・八	三・四	二・一
貴州	二一	四九・七	三〇・八	一一・〇	五・五	三・〇
湖南	三九	四八・四	三八・七	一〇・二	五・二	二・五
江西	二四	四七・二	三三・五	一〇・七	五・二	三・四
浙江	四五	五三・五	三一・四	八・四	四・七	二・〇
福建	二九	六二・二	二五・七	六・一	四・〇	二・〇
廣東	三九	六二・一	二六・五	六・五	三・一	一・八
廣西	四一	六三・〇	二三・九	七・五	三・七	一・九
平均（計）	八九一	三五・八	二五・二	一四・二	一六・五	八・二

右表によれば、一〇畝以下即ち大及ヒ畝以下経営農家は、全國を平均して総農家戸数の三五・八%をしめ、二〇畝以下即ち一町三反四畝以下経営農

家は、總農家戸数の大一、〇%をしめてゐる。さらにたち入つて觀察すると、さきにも述べたやうに、南支米作地帶においては經營面積の零細性はとくに著しいもので、二〇畝以下經營農家の總農家戸数に対する割合は、湖北において八三・八%、四川において七二・八%、雲南において八七・七%、貴州において八〇・五%、湖南において八七・一%、江西において八〇・七%、浙江において八四・九%、福建において八七・九%、廣西において八六・九%、廣東において八八・六%となつてゐる。

右のやうな經營面積の零細性、とくに貧農における平均三反乃至七反といふ驚くべき極度の零細性は、農業における合理的經營を全く絶望的たらしめる程のもので、したがつて新式機械の採用の效果は全然期待されず、農業經營は專ら手勞働の集約化のみに依存せざるを得ない。

しかも以上のやうな經營面積の零細性に加ふるに、支那においては、一農家の耕地がしばしば幾枚かの小耕地に分割されるといふ所謂散圃制度、Streifensystem がみられるのである。土地委員会の調査によれば、支那に

おける水田及び畑地一枚當りの平均面積は次の如くであつた。(6)

水田畑地一枚當りの平均面積

省別	水田一枚當りの平均面積	畑地一枚當りの平均面積
察哈爾	四一・二九二（市畝）	四八・七六九（市畝）
綏遠	九・一八四	九一・一七六
陝西	二・一一九	五・〇八一
山西	六・九〇六	八・五五六
河北	六・八二二	四・七七五
河南	二・一四六	三・八三四
江蘇	二・二五四	三・九八九
安徽	一・一五七	二・〇三九
湖北	一・〇八三	一・一九二
湖南	一・〇五〇	〇・六七四

江西	〇、八五七	〇、六九六
浙江	一、〇六七	〇、七二六
福建	一、三五三	〇、九〇〇
廣東	一、三二四	一、四八九
廣西	〇、七三〇	〇、八六三
總平均	一、二五四	二、九九五

中央研究院の無錫の調査によれば、各農家一戸當りの耕地面積は平均一六、五畝であつたが、同時に各戸の耕地枚數は平均一二であり、一枚の平均面積は二畝半であり、最小のものは僅か〇、三五畝であつた。(7) 李景漢氏の河北省定縣の一大村についての調査によれば、二〇〇戸の農家中僅か二十大戸の耕地のみが六枚に分れてゐるばかりで、甚だしきは二十枚にすら分れて居り、一枚の耕地は大多數が五畝以下であつた。(8)

耕地のこのやうな分散状態が、耕作に當つて著しい労力の浪費を生ぜしめ、合理的経営を不可能ならしめるものであることは云ふをまたない。これは西欧の観察者にとつては著しく注目に値する現象であるらしく、たとへば、トーネー教授は、支那における農業経営の第一の特徴として土地が細分され、その部分部分がきはめて零細であることを指摘して次のやうに述べてゐる。「畦によつて小さく區切られてゐる土地、それが支那の廣大な、嚴粛とも見える自然の風景といかにもそぐはない有様を呈し、恰も巨人の國に矮人が農業を営んでゐるかのやうな印象をあたへてゐるのである。」(9)と。

経営面積の零細性は、土地利用の極度の集約化を齎す。即ち、限られた地積から出来る限り多量の收穫をあげるために、輪作或は間作が行はれるのである。ウイットフォーゲルは之を「組合せ耕種法」Fruchtkombination と名付け、支那農業の一つの特徴として指摘してゐる。(10) とくに経営面積の零細なる南支の水田においては二毛作或は三毛作が行はれ、一部では四毛作の作物が相ついで作られてゐるとも報告されてゐる。ロッシング、

バッソの調査によるならば、廣東省、廣西省東半、福建省南半を含む所謂水稻二毛作区では全耕地の七十%が二毛作地であつた。(11) このやうな輪作或は間作が、労働力の極度の集約化を必要とすることはいふまでもない。

さらに右のやうな輪作或は間作によつて、支那の土地は一年中休む暇なく、二回、三回或は四回にもわたつて、作物によつて榮養分を吸收されるのであるから、支那の農業においては、施肥が農業經営上きはめて重要な意義をもつことになる。何故ならリービッヒの法則は、土地が作物によつて吸ひ取られた榮養分は再び之を肥料として土地に返さなければ、土地は榮養分に涸渇し、貧瘠化することを教へてゐるからである。支那では、人糞をはじめ、あらゆる廃物、莖、稈、灰、蛹、屑繭、魚、泥等が肥料として集められ、そのために費消される労働時間は、家内工業に費される時間よりも多いといはれてゐる。(12) 金肥は富農以外には殆んど用ひられない。さらにこのやうにして集められた肥料は、出来るだけ節約して利用される。耶ち、雨が肥料を流し去るかもしれず、肥料が余りに深く土地に滲み込ん

で了ふかもしれないので、肥料は一度に土地に注ぎ込まれることなく、数回にわたつて施される。その上支那では肥料は節約のために土地に対して施されず、頭割りに植物の一本一本に対して施されてゐる。このやうな施肥法は、一層労働力の集約化を促すものである。経営面積の零細性は、右のやうにして、支那の農業を、労働力に対する濫費的経営たらしめてゐる。

二、農　具、役畜

以上のやうな零細なる経営面積の上にたつ労働集約的農業経営は、同時に其他の労働手段の規模をも決定するものであり、支那の農業経営に於て用ひられる農具を、著しく矮小、原始的なものたらしめ、役畜の使用をも著しく制限するにいたつてゐる。しかし、こゝでも、たんに経営面積の零細性といふ技術的なモメントばかりでなく、半封建的な高率小作料の圧迫による零細農民の貧困化が、一層農具の改善、役畜の購入による農業経営の合理化の阻止を促進してゐることはいふまでもない。

この点に関してウイットフォーゲルは次のやうに述べてゐる。「支那の

従来の集約農業においては、比較的複雑な労働器具は、一方では必要でなかった。けだし機械使用以前の発展段階における集約耕作は、正に主として手による植物の手入れの状態にあり、つぎに、きはめて単純な器械器具類が使用されるだけだからである。その器械器具類も、部分的には、全然使用できなかった。けだし、種々な栽培植物を同時的に栽培する複雑な経営は、たゞ比較的廣大な空間においてだけ使用しうべき器具の利用をば排除するからである。……その外に、経営規模の大きさ、即ちきはめて矮小規模の経営が、近代的機械の出現した後もまた、それにも不拘、この機械の利用を排除する。けだし新たなる諸機械は小経営にとつて不合理であり財力がゆるさないからである。」(13)

したがつて、支那においては、現在にいたるまで、極く少数の地域で機械を使用して灌漑を行ひ、僅かに棉織機、稻扱機等の改良農具を使用するにいたつたのを除くならば、一般には依然として、何百年來変らない原始的な農具のみが使用されてゐるのである。たとへば、最も重要な耕耘過程

にはいまなほ旧式の犁や耙が用ひられるばかりであり、播種、揷秧、施肥、除草等の労働過程も殆んど手労働のみにより、収穫にも僅かに鎌を用ひるにすぎない。トーネー教授は、支那における農具に関して次のやうにのべてゐる。「西洋において好成績を收めてゐる農作は益々化学と生物学と機械的發明とに依存してゐる。ところが支那においては、大学と政府の影響下にある地域を除いては、それらの恩恵を蒙ることがないのである。――重い鋤、竹か又は粗い鉄で作られた熊手、数吋の深さしか掘れない犁、播種の後に地面をならす石のローラー、作物を刈る長い柄の鎌、穀物を土床の上でうちくだく連枷――。満洲以外には機械力は殆んど用ひられてゐない。たとひ農民にその資材があつても、土地の狹小なことが事実上それを不可能たらしめてゐる。」(14)

しかも、以上にあげられた簡單な農具すら、零細経営農家では購入する資力をもたないのである。このことは、たとへば、薛暮橋氏によつてあげられた徐州衛立民報教育館によつて行はれた、銅山及び蕭縣における調査

の結果からも明かである。(15)

	銅山	蘭縣
大車をもつ農家	一一%	二六%
大車なき農家	八九%	七四%
犁耙をもつ農家	二一%	三五%
犁耙なき農家	七九%	六五%

さらに同じ調査は、次のやうな農具の所有と農家の所有土地面積との相関関係を明かにしてゐる。(16)

一戸當り平均所有土地面積（徐州）

大車ある者	一六、五七畝
大車なき者	三、七六畝
犁耙ある者	一一、七二畝
犁耙なき者	二、四一畝

これは、先にも述べたやうに、農具の使用が、いかに経営面積の零細性によって制限されるものであるかを明かにするものである。

しかし、機械の農業経営への導入を阻止するモメントとしての耕地の零細性は、つねに支那における半封建的土地所有関係から生ずる零細農家の貧困状態との関聯の中で理解さるべきものであった。したがって、このやうな半封建的土地所有関係が崩壊し、農民の掌中に余剰分を蓄積する余裕があたへられるならば、機械の農業への導入は、支那においても確実に可能とされるわけである。たとへば、現在においても、資本主義的関係が最も発達してゐる江蘇省、浙江省の南東部、上海、蘇州、杭州及び福建省、廣東省の若干の地方においては灌漑機械の採用が相當普遍化してをり、ある地方では電力灌漑さへ行はれてをり、たとへば、江蘇省無錫縣の如きでは機械灌漑を行つてゐる農家がすでに八〇%前後をしめ、市に近い区域では、半数以上の農家が新式の箱扱機を採用してゐるといはれてゐる(17)。「灌漑に機械を用ひた處では、その結果はきはめて良好であり、時として收穫

が倍加した。一九二四年には漳州附近の水田の灌漑に電力が用ひられ、翌一九二五年には、機械と電力とによる灌漑面積は三八、二三四畝に達した。一畝の水田の灌漑は手労働によれば、この地方では二弗を要するが、電力によれば一・五弗である。機械と電力を用ひて灌漑するに至つてから、収穫は二、三倍増加した。非灌漑地或は灌漑のわるい土地では、一畝からの収益は一。弗であるが、機械灌漑の土地は三。弗となる。」(18)

――マジマリルは、以上のやうに報告してゐる。これらの事実は、もし社会的條件が資本の農業経営への導入を許すならば、農業技術の改善と機械の採用とは支那においても充分に期待されうるものであることを物語つてゐる。支那の農業は、人口灌漑による水田耕作を主とするものであるから、支那において、機械の農業部門への導入は不可能であるとはしばしば語られるところであるが、機械の導入を阻止する決定的なモメントは、決してこのやうな自然的要因ではない。(註)

次に畜役の使用状態について考察しよう。支那における役畜の使用はき

はめて小規模のものである。たとへばマジアールは、「支那の農業經營における役畜使用の小規模性を充分に理解しないならば、吾々は極東の農業經濟をその眞の姿において理解することは出來ない。」(19) といつてゐる。トルネー教授も「支那における役畜の農業經營における重要性は、西洋諸國におけるそれに比するならば、取るに足りない程度であり、他所ならば動物がなすべき労働も、支那では農民とその家族が行ふのである。」(20) といつてゐる。ロッシング、ベックの調査によるときは、支那における役畜労働の大人一人に対する作業量割合は〇・四八対一であるが、アメリカにおいては三・八二対一である。即ち支那における役畜の使用割合はアメリカの約八分の一にすぎない。(21) これは、さきに支那における農具の矮小、原始性について述べたと同じく、零細なる經營面積を余儀なくされてゐるばかりでなく、その上に過重なる小作料負担を負はされてゐる支那零細農民の窮乏を反映するものに他ならない。

りとは、たとへば、廣西省十縣廿四ケ村における陶直夫氏による役

畜力農家階層別分布状態からしても明瞭となる。次表をみよ。(22)

	戸数百分比	役畜百分比	一戸當り平均役畜数
地主	二・八	五・五	二・三〇
富農	六・三	一四・七	二・七五
中農	二一・四	三一・五	一・七四
貧農	六九・五	四八・五	〇・八二

右表からも明かにされるやうに、一戸當り平均役畜数は経営面積の大なる富農において最大であり、中農、貧農と順に平均数を減少し、貧農においては、平均〇・八二頭、即ち平均一頭を所有しえないのである。

このやうな貧農の、役畜に関する貧困な状態は、たとへば、「幫手」といふ特殊な雇傭労働形態の存在の中にあらはれてゐる。「幫手」とは役畜を所有しえない貧農であつて、地主或は富農から耕牛をかりて自家の耕作を行

ひ、その代償として農繁期に無償で富農或は地主のための農業労働に従事するものをいふのである。耕牛を所有しない零細農民が、三日の労働を牛一日の使用と交換する「一牛抵三工」といふ類の慣行は支那の各地にしばしばみられるところであるといはれる。(23)

以上から、支那における農業経営が、半封建的土地所有関係の下にあつて、極度に零細なる耕地の上にたつ経営を余儀なくされ、極度に貧困な生活状態にあり、したがつて、農具、役畜の合理的な使用を全く不可能にされ、矮小原始的な農具役畜の使用を甘受せしめられてゐること、そしてこれらの事情が農業における生産力の發展を著しく阻止するモメントとなつてゐることが明かにされたと思ふ。

三、労働力

さきにも述べたやうに、支那の農業経営は半封建的土地所有関係の支配の下にあるために、その中に資本の導入される機会は殆んどない。したがつて経営は専ら、零細なる耕地の上に、殆んど農具、役畜を装備しない裸

の手労働の集約的投下によって行はれるの外なく、資本主義的大規模農業経営は全然みられなかった。このやうな事情のために、支那においては、農業労働は殆んど凡て零細農家の家族労働力によって行はれ、雇傭労働力の割合はきはめて小さいのである。

いま雇傭労働と家族労働との全農業労働中にしめる割合を、農家階層別に調査した中國農林経済研究会の無錫における調査結果を示すなら次表の如くである。(24)

	一戸當り平均耕地面積	家族労働者	雇傭労働者
地主	一三、三〇畝	五九、五%	四〇、五%
富農	一七、六三畝	七七、二%	二二、八%
中農	九、〇五畝	九一、四%	八、六%
貧農	八、一七畝	九六、八%	三、二%
平均	九、〇五畝	九〇、七%	九、三%

即ち、地主、富農を除くならば、雇傭労働の割合は總労働中一〇%にも
みたないのである。
さらに、ロッシング、バックの指導の下に行はれ金陵大學の調査によれ
ば、各種農場における全農業労働に対する雇傭労働の割合は、次のやうで
あつた。(25)

	小農場	中農場	大農場
北支	四・一%	一三・〇%	三一・八%
中支	四・五%	一五・七%	二〇・一%

いま、欧米における同じ割合をあげるならば、英國では一九一一年にお
いて三五%、ドイツでは一九二〇年において三六%、米國では一九二〇年
において二五%、フランスでは一九一一年において三二%であつた。(25) 之
と比較するとき、支那における右のやうな割合は北支の大農場を除けば、
一般に欧米のそれよりはるかに低いことがわかる。

次に、支那における雇傭労働の質的特殊性について考察しよう。支那における雇傭労働は専ら比較的大きい経営面積を有する富農のもとにみられるのであるが、これらの雇傭労働は殆んど皆で、土地、農具、役畜を欠乏した貧農の労働力を使用する半封建的な性質のものであって、近代的賃労働関係にたつものはきはめて少い。

薛暮橋氏は、支那における雇傭労働について、次の四種の形態をあげている。(27)

一、封建的乃至奴隷的労働様式　　これは西南地方の若干の最もおくれた農村に相当残存している。奴隷には幼時に買はれて来た男子が成長して奴隷に変じた者と、長期の雇傭労働者が、主人の家の婢と結婚し、終身主人の家に服役する者とがある。後者の中には、結婚後主人から若干の土地と小屋とをあたへられて半ば獨立の生活を営み、奴隷から農奴に変じてゐる者がある。

二、半封建的雇傭労働　　これは全國に普及し、支那の雇傭労働中最も

一般的な形態であるが、さらに三種の形態に區別される。先づ第一の形態は、土地を欠乏した貧農が、地主或は富農に雇傭される場合にみられる。たとへば、江蘇省宝山縣に普及してゐる「脚塞」や、湖北省棗陽にみられる「趕工」の如きが之である。この種の雇役農民は、その労働の報酬として土地の使用を許されるのである。一般の小作農であつて、農繁期に、少額の賃銀により、或は甚だしきは無報酬で、地主に雇傭労働を強制される者が見うけられるが、之もこの形態に屬する。第二の形態は、負債のために、地主或は富農によつて強制的に雇傭労働に服せしめられる場合にみられ、普通には年末に地主或は富農から金銭或は穀物をかりうけ、翌年の農繁期に雇傭労働に服して支拂ひをするものである。第三の形態は、役畜を缺乏した貧農が、地主及び富農から役畜をかりうけ、その代償として無償で地主或は富農のための労働に服する場合である。江蘇省蕭縣にみられる「幫手」の如きはこの例に屬する。（これは役畜に関聯して上述したところである。

二、資本主義的賃銀労働

これは、季節的出稼労働の形態をとり、富農或は地主との自由な契約にもとづいて、雇傭労働に従ふものであり、「遊行工人」と称せられる。たとへば、河南省、山東省の貧農は、その地の小麦の収穫が終ると、逐次北方へ赴き、河北省において麦の収穫労働に従事し、甚だしきは長城以北にも足を伸ばす。また廣西省の地主及び富農の農繁期の労働は専らこのやうな出稼労働者を雇傭して行はれる。

一般に以上にあげた三種の雇傭労働形態のうち、奴隷労働は西南各省に、半封建的賦役労働は北支諸省に、資本主義的自由労働は南支とくに東南地方に行はれる。しかし支那の農業においては、資本主義の展開がほとんど見られず、完全に土地から引きはなされた農業プロレタリアを析出しえてゐないために、純粋の資本主義的農業労働者の存在は殆んど見られず、右にのべた自由労働形態といへども一時的出稼的なものにすぎない。彼等は、一方において、労働力を販賣すると同時に、他方において自ら農業を経営する所謂半プロレタリアである。支那の農村における大多数の労働者は、孫曉村氏の言葉をかりるならば、苦力

及び貧農と三位一体をなしてゐる。即ち孫晩村氏はこの関係を次のやうにのべてゐる。「河南省の農村において、土地を全然所有してゐないか、或はごく僅かしか所有しゐない農民たちは、今日自分の土地或は賃借りした土地において耕作してゐるかと思へば、明日は他家の雇農となり、明後日には苦力となつて都市の商店のために商品を運搬してゐる。……これらの三位一体的な分子は河南省においては純粋の雇農に比し、その数数十倍にも達してゐる」[28]と。

以上吾々は支那における農業生産力を形成する個々のモメントとしての生産諸力を、専ら、土地、農具、役畜、労働力に関して、やゝたち入つて考察し来つた。その結果、それらの生産諸力が、質量共に、零細、原始的な封建的形態を負はされてゐることが明かにされ、同時に、このやうな状態は基本的には、支那の農業を支配してゐる半封建的生産関係によつて規定されたところのものであることを知つた。即ち、支那の農業を支配する半封建的な土地所有関係は、農業経営への資本の導入を阻止することによ

いて、農業における資本主義の発展を阻止し、農業生産諸力に対して中世的な形態を賦與することによって、農業における生産力発展への強力なブレーキとなつてゐるのである。

マジアールは、農業生産技術と生産関係との不可分の関係次のやうに指摘してゐる。「軍國主義と帝國主義と地主との圧迫が、支那農民から地代とその僅かな「資本」に対する利潤ばかりでなく、労賃の著しい部分をさへ奪へ去る間は、又高利貸と商業資本とが農村を支配してゐる間は、技術の向上は思ひもよらない。経験の示す限りでは、支那の農事試験所、農業大學等の影響は僅少の農村に波及してゐるだけであるから、その意義は殆んどいふに足りない。農民的生産者が、中世期抑圧から解放されない間は、技術改良の大道にふみ出すことは不可能であり、没落、貧困、饑餓、破壊の道から、又かつての農饒と文化の地域が不毛の荒野に転化することから免れる道はないのである。」(29)

（註）

(1) トーネー「支那の農業と工業」邦訳清水佐美太郎、牛場友彦、[illegible]一

(2) 孫曉村「現代支那の農業経営問題」邦訳堀江邑一「現代支那の土地問題」P、一四四以一

(3) 同 P、一四六、一四七

(4) 同 P、一四九

(5) 同 P、一二〇、一二一

(6) 同 P、一五〇、一五一

(7) (8) 孫曉村前掲論文P邦訳本P、一五〇

(9) トーネー前掲書邦訳本P、三四

(10) ウイットフォーゲル「支那の経済と社会」、邦訳平野義太郎「解体過程にある支那の経済と社会」P、三八五

(11) ロッシング、バッグ「支那における土地利用」邦訳三輪孝、加藤健「支那農業論」下巻P、二〇

(13) ゾンマール「支那農業経済論」邦訳本P、八四
(14) ウィットフォーゲル前掲書邦訳本P、一[illegible]、一九六
(15) トーネー前掲書邦訳本P、四五、四六
(16) 薛暮橋前掲書邦訳本P、三六、七七
(17) 同右P、七八
(18) マジアール前掲書邦訳本P、一四四
註、勿論このことは、水田耕作に人工灌漑を必要とする農業経営という自然的條件のもつ特殊性がある程度まで、農業における機械の導入を阻止するものであることを当然否定するものではない。こゝで私の云はんとするところは、農業における技術の発展を窮極的に規定するものは、自然的條件にあらずして、あくまでも社会的條件であるといふことである。
(19) マジアール前掲書邦訳本
(20) トーネー前掲書邦訳本P、四六

(21) 孫曉村「現代支那の農業経営問題」邦訳本堀江邑一前掲書P、一七。
この調査は、バックの最近（一九二九―三三）大規模調査以前のものであり、Chinese farm economyにおさめられる。

(22) 陶直夫「支那現段階の土地問題」邦訳堀江邑一前掲書P、八三

(23) 薛暮橋前掲書邦訳P、六三

(24) 同　右　P、五九

(25) 陶直夫「支那現段階の土地問題」邦訳本、堀江邑一前掲書P、八二
この調査は、最近の「支那における土地利用」によって結実した調査ではない。

(26) 孫曉村「現代支那の農業経営問題」邦訳本堀江邑一前掲書P、一五八

(27) 薛暮橋前掲書邦訳本P、六一以下

(28) 孫曉村「現代支那の農業経営問題」邦訳本堀江邑一前掲書P、一一四

(29) マジアール前掲書邦訳本P、一〇六

三、生産力――農業經營調査結果の分析

吾々は(二)において支那の農業における生産諸力に関して些かの分析を試み、その結果支那における生産諸力が、支那の農業を支配する半封建的生産関係の下にあつて、いかに零細、原始的な形態をとることを余儀なくされてゐるかを明かにし、そこから、支那における農業生産力が中世的な停滞性の中に埋没されつゝあることを断じ来つた。いふまでもなく、農業における生産力は、これらの生産諸力が生産の目的にとつて合目的的な形態において結合され、生産過程の中で生産力としての機能を発揮せしめられるときにはじめて実現されるものであるが、このやうな生産的活動の主体となるものは個々の農業経営に他ならない　即ち(二)において考察し来つた個々の生産諸力は、農業経営の中において統一されて、現実的な生産力となり、その結果は農産物収穫高の中に示されるのである。したがつて、吾々は、農業生産活動の主体としての農業経営を全体として考察すること

によつて、(二)において断定し来つたところを、具体的に確認することができるのである。吾々は、かりに、しばらくロッシング、バックにより塩山縣百五十農家の経営調査及び蕪湖附近の百二農家の経営調査並びに、同じくロッシング、バックの指導の下に、一九二九——三三年にわたつて支那二二省一五四縣一六八地方の一六六八農家に関して行はれた農家調査の結果を分析することによつて、支那の農業生産力に関して上来述べ来つたところに関する具体的計数的な支持点を求めようと思ふ。

さて、(二)において既に明かにされたやうに、支那における農業経営の特質は、何よりも先づ経営面積の零細性のうちに見出された。そして、このことは、その上に加へられる半封建的収取の圧迫とともに、その有する農具及び役畜をして、零細、原始的なものたらしめ、農業経営をして、専ら家族労働力の集約的投下に依存せしめるものであつた。したがつて支那における典型的農家は、総農家戸数の七〇%をしめる貧農層の中に見出され、これら貧農層の一戸当りの経営面積は僅か五畝乃至十畝にすぎないものであつ

だが、ここで吾々は、支那における典型的農家とみなされるところの経営規模、換言すれば以下の農家層に動き視点を集中して、以上にあげた、ロッシング、ベックによる農業経営調査結果の分析を試みることにする。

（一）先づ塩山縣百五十農家の経営調査の結果をみるに以下の如くである。[14]

経営規模による農家の分類　（八単位銀弗）

投資種類別	一〇畝以下	一一畝―二〇畝	二一畝―三〇畝	三〇畝以上	農耕地一畝当り平均
土地所有または賃借権設定	二〇、四四	一七、九一	一九、六三	一七、一四	一八、〇八
建物	一三、二三	九、〇四	七、九六	六、〇〇	七、五五
家畜	〇、四〇	一、三一	一、四二	一、六一	一、四三
樹木	一、五一	一、三一	一、三七	一、二九	一、三三
食糧貯蔵及び薪炭	二、二三	一、七六	一、二八	一、〇三	一、三二
種粒	〇、六一	〇、七六	〇、七三	〇、七二	〇、七二
労働用具及び諸施設	〇、四七	〇、五九	〇、七一	〇、八一	〇、七二

一畝當り総價額	三八、八九	三二、六八	三三、一〇	二八、六〇	三一、一五

右表は各層農家の生産手段に関する一畝當り資金投下額を示したものである。先づ一畝當り投下資金總價格についてみるに、一〇畝以下経営農家は、各層農家中最大で、三八、八九銀元を要し、一一―二〇畝経営農家においては、三二、六八銀元、二一―三〇畝経営農家においては、三三、一〇銀元、三一畝以上経営農家においては、二八、六〇銀元となつてゐる。即ち生産手段に関する一畝當り投下資金額は、一〇畝以下の零細経営農家層において最も大きい。このことは建物に投下される資金額において最も明瞭に示される。即ち一〇畝以下の零細農は建物に一畝當り一三、二三銀元を投下しており、これを三〇畝以上経営農家層における六〇〇銀元に比するならば、一〇〇%以上多い。食糧貯蔵及び薪炭のための支出に関しても同一の傾向が示される。家畜及び労働用具に関しては、右表中の数字がたんにこれらの諸費に対する支出のみを記録してゐるにすぎないことを注意しなければ

らない。貧農は、(二)に於ても述べたやうに、これらの家畜及び労働用具を所有せず、その何れをも地主或は富農から借入れねばならないことが多いのである。したがつて、貧農がもし、これらの必要なる諸施設を借入れないで自ら設備したとするならば、一畝當り投下資金額は最大の経営農家層におけるよりもはるか多額に上つたであらう。以上から明かにされるやうに一。畝以下の零細経営農家において、より大規模の農家に比して、生産手段に関する一畝當り投下資金額がはるかに大であるといふことは、零細農家における生産手段の合理的経済的な使用が、経営規模の零細なるために、著しく困難にされてゐることを物語るものである。即ち零細農家は大規模経営農家層よりも、質的に貧弱なる生産手段を、より非合理的に使用せざるを得ないのである。

次に零細農家が、労働力に関しても、如何に非合理的な経営形態をとることを余儀なくされてゐるかを明かにするために次表を掲げる。

経営面積	一收穫畝当り平均收穫	一收穫畝当り平均労働費用	一收穫畝当り平均收入
一〇畝以下	五・三八	二・二二	三・一六
一一畝―二〇畝	四・九八	一・七九	三・一九
二一畝―三〇畝	四・七〇	一・四〇	三・三〇
三一畝以上	四・六九	一・一九	三・五〇
平均	四・八一	一・四四	三・三七

（単位銀元）

右表から明かにされるやうに、一收穫畝當り平均收穫は、一〇畝以下経営農家において最大を示してゐる。しかるに、このやうな単位面積當り收量上の優位は、たゞこの単位面積に対してより集約的に労働力を投下することによつてのみ齎らされた結果に他ならない。即ち一收穫畝當り平均労働費用は、一〇畝以下経営農家において二・二二銀元と最大を示し、三一畝以上経営農家層のそれの約二倍にまで達してゐる。そのために一收穫畝當りの労働費用を控除した平均收入は、當該農家層において最小となつてゐる

つづいている。しかも、このやうな集約的な労働投下は、専らきはめて原始的な農具を使用し、貧弱な役畜を使役することにより殆んど裸のまゝで行はれてゐるのである。一労働力當りの平均耕地は、一〇畝以下経営農家層においては、一三、三收穫畝にすぎず、之を一一畝一二〇畝経営農家層における一七、九畝、二一畝一三〇畝経営農家層における二三、六畝、三〇畝以上経営農家層における二九、二畝に比するならば著しく小さい。耶ち一〇畝以下経営農家は、経営面積の零細性のゆえに、労働力に関しても著しい浪費的、非合理的な利用形態をとることをやむなくされてゐるのである。

以上から吾々は、支那における農家の典型をなしてゐる経営面積一〇畝以下の貧農層にあつては、経営面積の零細性にともなふ経済的技術的な諸原因によつて、その労働の生産力の充分な展開が全く不可能にされてゐることを断定することができるのである。これは一労働力當り生産額の中に集中的な表現を見出してゐる。耶ち一労働力當りの年所得は、一〇畝以下経営農家においては僅かに三三、七三銀元にすぎない。これに比して、一一

畝一二〇畝経営農家においては四〇・四三銀元、二一畝―三〇畝経営農家においては四〇・二七銀元、三〇畝以上経営農家においては、四七・九〇銀元となつてゐるのである。

（三）次に同じくロッシング、バックによつて蕪湖附近の百二農家に関して行はれた調査の結果を検討しよう。調査結果を示すものは、左に掲げられた数字である。(12)

経営規模別分類	一〇畝以下	一一畝―二〇畝	二一畝―三〇畝	三〇畝以上	平均
人間労働 男一人当り一年の労働日数	五三・一日	七七・五日	八八・九日	一一〇・八日	八二・五日
人間労働 一経営當り労働力	一・五人	二・二人	三・一人	五・九人	二・九七人
人間労働 一労働力當り耕作面積	五・三畝	七・三	八・一	一〇・〇	七・一
労働日数	一一四日	二一・四日	二四・九日	三〇・三日	二四・一日

経営規模別分類	一〇畝以下	二一畝―二〇畝	二一畝―三〇畝	三〇畝以上	平均
役畜 一経営当り役畜数	〇、五頭	〇、八頭	一、〇六頭	二、〇五頭	〇、九頭
役畜一頭当り耕作面積	二〇畝	二〇、一畝	二三、七畝	二九、二畝	二四、八畝
農具 一経営当り価格	三九、六元	六一、五八元	七六、五〇元	一六五、六三元	八一、五三元
耕地一畝当り農具及び設備費（価格二十元の設備を以て耕作される面積）	四、〇〇畝	五、二畝	六、三畝	七、一畝	六、〇三畝
総資本に対する建物使用百分比	四、九五元	三、八五元	三、一六元	二、八一元	三、七五元
	八、二%	四%	一〇、三%	八、五%	七、三%

先づ人間労働について観察しよう。一労働力当り耕作面積は、経営規模の小なるに従つて小さくなつてきり、三〇畝以上経営農家における一〇、〇

畝に比して、一〇畝以下経営農家においては五、三畝と約半分にすぎない。したがつて、一年當り年労働日数についても同じ関係が見られ、三〇畝以上経営農家における一一〇、八日に比して一〇畝以下経営農家においては五三、一日にすぎない。それ故零細農は、経営面積の零細性のゆえに、自家の耕地の上に、その労働力を完全に燃焼せしめることができず、その結果自家の耕地に対して濫費的にまで労働力を投下すると同時に、農繁期には富農或は地主の許において雇役労働に従事することによつて、辛ふじて生計を維持しなければならないのである。

次に役畜について見るに、一経営當り役畜数は、一〇畝以下経営農家においては、平均〇、五頭にすぎず、三〇畝以上経営農家の二、〇五頭に比して、約五分の一にすぎない。しかも役畜一頭當り耕作面積、役畜の年労働日数からも知られるやうに、一〇畝以下経営農家は、各層農家を通じて、役畜の使用度においても最も貧弱である。即ち経営規模の零細なることが、役畜を使用する余地を著しく制限してゐるのである。

さらに、農具について見るに、一経営當り農具價格は一〇故以下経営農家において最も少い。それにも不拘、耕地一畝當り農具及び設備費は一〇、故以下経営農家において最も多く、四・九五銀元を要しており、之を三〇故以上経営農家の二・八一銀元に比較するならば、約一・七倍となつてゐる。これは、経営面積の零細性が、いかに農具の合理的使用を制限するかを明かにするものである。

以上から、一〇故以下経営農家においては役畜の使用がきはめて貧弱であり、これらの農家が、専ら零細原始的な農具を装備した裸の労働力の過度集約的な投下にのみ依據した経営を行ふことを余儀なくされてゐることが明かにされたと思ふ。

それでは、右のやうな経営は、その結果として、どのやうな生産力を示してゐるのであらうか、それを明かにするものは次の数字である。

	一〇畝以下	一一―二〇畝	二一―三〇畝	三〇畝以上	平均
耕地一畝當り收入	二〇・二五	一八・一五	一八・二四	一八・五八	一八・四六
耕地一畝當り労働費用	一四・〇四	一〇・三一	八・八六	七・〇五	八・八四
労働費用を控除した收入	六・二一	七・八四	九・三九	一一・二二	九・六二

（單位銀元）

一〇畝以下經營農家層は、耕地一畝當り收入においては、二〇・二五銀元と最大を示してゐるけれども、一畝當り労働費用に一四・〇四銀元と最大を投下してゐるために、一畝當り純收入においては、六・二一銀元にすぎず、其他の各層農家に比して著しく低いのである。かやうにして、一〇畝以下經營農家の單位面積當り收入が其の他階層農家に比して優つてゐるのはただその土地に労働力が濫費的に投下された結果に他ならない。

（三）以上の調査は、きはめて小範圍の農家にわたる標本的調査にすぎないが、ここで、吾々は最後に、同じくロッシング、バックの指導の下に南京金陵大學によって、一九二九年から一九三三年にわたって行はれた支那二二

省、一五山縣、一大八地方にわたる一六、七八大農家に関する各層農家経営のしかも生産力に関する考察を行つてみよう。(3)

先づ、経営規模に関するデータを、各農家階層別に掲げるなら次の如くである。

	小農家	中農家	中大農家	大農家	特大農家
平均農地面積（エーカー）	一、四三	二、八四	四、九二	七、一七	一三、〇二
小農家を一〇〇とする右の指数	一〇〇	一九八	三四四	五〇一	九一〇
地片の平均面積（エーカー）	〇、五二	〇、七二	〇、九六	一、三一	一、七五
小農家を一〇〇とする右の指数	一〇〇	一三八	一八四	二五一	三三六
田圃の平均面積（エーカー）	〇、三二	〇、四〇	〇、四七	〇、五九	〇、六九

小農家を一〇〇とする右の指数	一〇〇	一二五	一四六	一八四	二一五
生産的に使用される農地面積の百分比	八九・八	九一・七	九二・七	九三・三	九三・三
農用建物にあてられる農地面積の百分比	五・八	四・一	三・三	三・〇	二・五

右の諸表から明かにされるやうに、小規模農家の平均農地面積は、他の各層農家に比して著しく狭い。即ち小農家の平均農地面積は特大農家の平均面積の九分の一にすぎない。地片の平均面積及び田圃の平均面積についても、小農家は最も小さく、之を特大農家と比較するときは、夫々三分の一及び二分の一である。次に生産的に使用される農地面積の百分比をみても、小農家においては、八九・八%であり、中農家、中大農家、大農家、特大農家が夫々九一・七%、九二・七%、九三・三%、九三・三%であるに比して最も小さい。之と逆に、農用建物にあてられる農地面積の百分比は、小農家が最も大き

く、中農家、中大農家、大農家、特大農家が夫々四・一%、三・三%、三%、一・九%なるに比して、五・八%をしめてゐる。即ち、農地面積の最も小さい小農家が、之を最も非合理的に使用してゐることになる。

右のやうに小農家においては経営面積が余りにも零細であるために、耕地は農家の労働力を完全に燃焼させるにたりない。この点は、一人當り及び一年労働等値者に（[illegible]）、當りの作付面積の中に示される。この比を示すものは左の数字である。

	小農家	中農家	中大農家	大農家	特大農家
一人當り作付面積（エーカー）	〇・二一	〇・三三	〇・四五	〇・五六	〇・七七
小農家を一〇〇とする右の指数	一〇〇	一五七	二一四	二六七	三六六
一年労働等値者一人当り作付面積（エーカー）	一・五	二・一	二・六	三・二	四・〇
小農家を一〇〇とする右の指数	一〇〇	一四〇	一七三	二一三	二六七

即ち、一人當り作付面積は、小農家が最も小さく、之を特大農家と比較するときは、その約四分の一となつてゐる。さらに「年労働等値者」一人當り作付面積についてみても、小農家は最も小さく、特大農家の約三分の一にすぎない。即ち小農家を一〇〇とする各層農家の指数は、中農家、中大農家、大農家、特大農家において夫々一四〇、一七三、二一三、二六六となつてゐるのである。

次に役畜單位當り作付面積をみるに左表の如くであり、同じく小農家においては、経営規模が零細であるために、役畜を合理的に使用することができないのである。

	小農家	中農家	中大農家	大農家	特大農家
役畜單位當り作付面積（エーカー）	二・六	三・八	四・八	五・七	六・七
小農家を一〇〇とする指数	一〇〇	一四六	一八四	二一九	二五七

以上から、小農家は、経営面積が零細であるために、土地、役畜等の合理的な利用を著しく制限されてゐることが分る。したがつて、これらの小農家は、限られた零細な耕地の上にたつて、出来得る限り労働集約的な経営方法をとらざるをえないのである。このことは、二毛作指数の各層農家別の比較によつて最も明瞭に示される。二毛作指数は次の通りである。

小農家	中農家	中大農家	大農家	特大農家
二毛作指数	一五三	一五一	一四九	一四七	一四三

即ち二毛作指数は、小農家において最大であり、中農家、中大農家、大農家、特大農家が夫々一五一、一四九、一四七、一四三であるに比して、小農家では一五三になつてゐる。これは小農家が、いかに零細な経営面積の上にたつて、労働集約的な経営を営んでゐるかを明かにするものである。しかも、このやうな集約的な経営を又てしても、與へられた経営面積が

余りにも小さいから労働力をこの土地の上に完全に燃焼せしめるにたりないのである。このことは、たとへば、農家一世帯當り人員中にしめる「年労働等値者」の割合の中に示される。即ち二の割合は、小農家、中農家、中大農家、大農家、特大農家において、夫々二五%、三〇%、三三%、三三%、三六%となつてゐるのであるが、このやうに、小農家において、「年労働等値者」の世帯人員に対する割合が、其の他の各層農家に比して低いのは、経営面積が余りにも小さいために、これらの小農家世帯員中の若干の者が、農業労働とともに副業労働に従事し、之からえられる収入によつて辛うじて一家の生計を維持してゐることを示すものである。

	小農家	中農家	中大農家	大農家	特大農家
一農家当りの世帯員中にしめる「年労働等値者」の割合	二五%	三〇%	三三%	三三%	三三%

さらに、このことを明かにするものは、農耕外の源泉による所得の百分

比において、小農家が最も大きくなつてゐることである。即ち農耕外の源泉による所得の百分比は次の如くである。

	小農家	中農家	中大農家	大農家	特大農家
農耕外の源泉による所得の百分比	二一%	一四%	一一%	一〇%	九%

以上から明かにされるやうに、小農家の経営面積はきはめて零細であるので、小農家はいかにその家族労働を過度集約的に土地の上に投下してみても、これを完全に燃焼せしめるに足らず、一部の家族労働力をして、農耕の外に、家計補充的な収入を求めしめるのやむなきにいたつゐるのである。富農及び地主の許における雇傭労働が専ら土地饑饉に困しむ零細農の半封建的な雇役労働によつて廣汎にわたつて行はれてゐることは、(二)においても述べられた通りであるが、さらに家計補充的な副業として養蚕、煙草焙焼、畜毛加工、手織等が全國各地にわたつて廣汎に行はれてゐるのであ

る。

右にのべたやうに、支那において、典型的経営たる小農家は、きはめて微細な経営面積の上にたち、過度集約的な労働の投下を行ひつゝ、専ら副業収入の補充によつて辛うじて饑餓水準を上下する貧困な生計を維持しつゝある。このやうな場合、農業の生産力は必然的に低い水準におしとゞめられざるをえないのである。

いま各層農家の農業生産力を、二、三の指標によつて相互に比較することによつて、支那における典型的経営たる小農経営のもつ生産力の水準を明かにならしめよう。

先づ吾々は、ロッシング、バックの調査結果としてあげられた、「年労働等値者一人當り穀物等値量生産高」を「年労働等値者一人當り作付面積」で除することによつて、「単位作付面積當り年穀物等値量生産高」を計出した。即ち左表の通りである。

	小農家	中農家	中大農家	大農家	特大農家
単位作付面積當り「年穀物等値量」生産高	五五二	五五六	五五六	五二四	五一八
小農家を一〇〇とするその指数	一〇〇	一〇一	一〇一	九五	九四

右から明らかな如く単位面積當り收量については、小農経営は他の農家階層に比してさ程劣つてゐない。むしろ大農家、特大農家に比して幾分優にたつてさへゐるのである。即ち小農家を一〇〇とする、単位作付面積當り「年穀物等値量」生産高は、小農家、中農家、中大農家、大農家、特大農家について夫々一〇〇、一〇一、一〇一、九五、九四となつてゐる。

しかるに、「年労働等値者一人當り穀物等値量生産高」を見るに、次表の如くであり、小農家を一〇〇とする指数を計出するならば、小農家、中農家、中大農家、大農家、特大農家について夫々一〇〇、一四一、一七四、二〇二、二五〇となる。即ち単位労働当り收量に関しては、小農経営は、其他の階層の農家に比して著しく劣つてゐるのである。

	小農家	中農家	中大農家	大農家	特大農家
「年労働等値者一人當り穀物等値量生産高」	八二八	一一六八	一四四八	一六七九	二〇七三

	小農家	中農家	大農家	特大農家
小農家を一〇〇とする右の指数	一〇〇	一四一	一七四	二〇二	二五〇

さらに一人當り「穀物等値量」生産高についてみるなら、小農家の生産力の貧困はますます明かとなる。

	小農家	中農家	大農家	特大農家
一人當り「穀物等値量」生産高	二二五	三五三	四七九	五五八	七七三
小農家を一〇〇とする右の指数	一〇〇	一五六	二一二	二四八	三四三

以上から明かにされる事実は次の如くである。――支那における全農家中典型的な経営規模である小農家においては、単位面積當り収量の点からすれば、その生産力は、其他の階層に属する農家に比して殆んど同じ水準を維持し、ことに大農家及び特大農家に比すれば、むしろ若干の優位をしめしてゐるのであるが、之を単位労働當り生産高から見るならば、小農家は大規模の農家に比して著しく劣つてゐり、特大農家に比するならば実に二分の一にすぎなかつた。これは小農家が、いかに経営規模の零細性

から生ずる数量の不足を、この零細なる土地の上にひたすら労働力を集約的に投下することによつてカヴアーしつゝあるかを明かにするものである。

一般に農業の生産力は、単位面積當り收量として示される場合と、単位労働當り收量として示される場合とがあり、前者は土地の生産力を指示し、後者は労働の生産力の指標となるものである。一般に小農経営に於ては、経営面積が零細であつて生産手段の合理的使用が行はれ難いから、専ら労働力の集約的投下によつて、このやうな土地不足から生ずる收量の不足を補はんとする傾向がみられ、従つて、低い労働の生産力が土地生産力を維持することによつてカヴアーされるといふ関係がみとめられる。小農経営においては、家計と経営との分離が決定的に行はれるにいたつてゐないから、純粋の企業としての立場からは、原價計算上不可能とされる程多量の労働力の投下が家族の不払労働力の犠牲によつて行はれるのである。小農論者の中には、しばしば、右のやうな関係から小農経営に持つてたまたま見出される土地生産力の大農経営に対する僅少な優位性から、たゞちに小

農経営を無條件に讃美する傾向がうかがはれる。これは、タビッドが、生産並びに消費に関してドイツ小農民経営に捧げた叙情詩的記述の中に古典的な形態をとつて示されてゐるのであるが、このことは支那の零細農民経営については、たとへばシモンによつてくりかへされてゐる。即ち、シモンは支那における零細農民の勤労をたゝへて次のやうに云つてゐる。「支那の農民は土地から欲するまゝのものを作り出す。支那人は氣候を愚弄する。彼には時といふものが勘定に入らない。彼は空間を残さず耕してしまふ。彼は道具を殆んど不要に帰せしめた。……未だかつて人間が之より輝かしい勝利を制したことはない。……社会が個人のためにかくも多くをつくしたことは決して他に類例がない……。」(4)

しかしながら、支那の零細経営における単位面積當り収量が大規模経営農家に比していささか優位をしめしてゐるのは、先にものべたやうに、他ならぬ労働力の無制限的濫費と生産手段のきはめて不合理な使用によつて辛うじて獲られた結果に他ならない。シモンによつて賞讃された支那三億

が零細貧農は、貧困と過労との中に饑餓水準上を彷徨してゐるのである。

以上においては、吾々は、專ら、支那における農業生産力を、支那における基本的土地所有関係との関聯の中において分析し来つた。即ち強力なる半封建的土地所有は、土地使用を壓迫して、大多数の農業経営をして著しく零細規模のものとし、農具、役畜等の生産手段の合理的使用を許さず、專ら過度に労働集約的な経営形態とるにいたらしめた。その結果、支那の農業経営中圧倒的多数をしめる零細経営においては労働の生産力はきはめて低い。これは先にものべたやうに、單位労働當り收量の点に関して、小農家が特大農家の五分の二にすぎないといふバックの調査結果からも明かであり、たとへば、國際的比較をとるならば次の数字の中にあらはされる。バックの調査によるなら、「年労働等値者當り平均生産高は、米國の二〇、〇〇〇弗に比して、支那のそれは一、四〇〇弗にすぎない。つまり米國の十四分の一にすぎない。

右のやうに支那における農業生産力の低位性は労働の生産力に関する限

りは問題なく断定しうるところであるが、土地生産力に関しては、改めていま一度の考察を必要とする。何故ならば、先にも掲げたバックの調査結果からもしられるやうに、単位作付面積当り収量に関しては、小農家は特大農家に比して九四対一〇〇といささか優位をしめてゐるからである。つまり、農具、役畜等の生産手段についてある程度まで、より合理的な経営がかへつて土地生産力の点では、より労働集約的な経営よりも低いといふ結果が生じてゐるからである。支那では、大経営においても経営内部への機械の導入は殆んど行はれず、役畜の使用農具の改良も農村を支配する半封建的関係の下にあつてきはめて低い段階にとどまり、その合理的使用は著しく制限されてゐる。一方、小農経営における労働力の無制限的な浪費は、さきに詳しく述べた通りである。

以上のやうな大経営における土地生産力の小経営に対する相対的低位は、専らこのことに原因するものであらう。しかしながら、問題は依然として残る。――一般に、機械の導入による合理的農業経営は、支那において

げ、従して土地生産力増進の目的によつてどれ程有利に作用するものであらうか、これはとくに水稲作について強く云はれる。何故なら人口稠密の上にたつ水稲作経営においては、機械を導入する余地は一般に少く、裸の労働力の集約的投下に依存しなければならないところがきはめて大きいといはれてゐるからである。

この問に対する解答は、改めて、アジア、モンスーン地帯の自然的諸條件との聯関の下における農業経営の特殊性に対する省察を要求してをり、さらに支那の農業生産力に関する地域別、作物別のより詳細なる考察を要請するものである。

（註）

(1) バックのこの調査は、Chinese farm economy に報告されるる。この資料が入手されなかつたので、吾々はウイットフォーゲル及びマジャールが、前掲書において引用して論じたところを再引用するこ

とにした。

(2) 註(1)をみよ。

(3) ロッシング、バック「支那の土地利用」邦訳本、前掲書による。

(4) シモン「支那の都市」ウイットフォーゲル前掲書P、四三、大、より再引用。